

クレオールタミル語説

- 大野晋はインド南方やスリランカで用いられているタミル語と日本語との基礎語彙を比較し、日本語が語彙・文法などの点でタミル語と共通点をもつとの説を唱えるが、比較言語学の方法上の問題から批判が多い。後に大野は批判を受け、系統論を放棄し、日本語はクレオールタミル語であるとする説を唱えた。 （出典 Wikipedia）

大野晋のクレオールタミル語説への批判 (wikipedia)(1)

- 大野晋の説については比較言語学の方法上の問題から批判が多い。主な批判として、以下のものがある。
- 村山七郎『日本語 タミル語起源説批判』(1982)
- 比較言語学者の風間喜代三による批判(1983)
 - ☞ 大野1981年『日本語とタミル語』に対し、風間喜代三は批判を行った。その後、比較言語学者やタミル語学者を始めほとんどの言語専門家は、大野の説に批判的である。
 - ☞ 2000年の『日本語の形成』において大野は、音韻、語彙、文法の三点において、日本語はクレオールタミル語であるという説を提出した。同書は、風間喜代三の語彙対応に関する批判については、指摘された語彙を削除もしくは変更している。

大野晋のクレオールタミル語説への批判 (wikipedia)(2)

比較言語学者の観点では大野説が比較言語学の正統的方法に従っていないことを批判している。特に、歴史性を捨象して単語比較を行っている点が問題視されている。とはいえ、日本語がクレオールタミル語であるならば、比較言語学の対象ではなく、クレオール言語学の問題となる。クレオール語理論は系統論ではなく、タミル語と日本語との共通祖語を抽出する必要は無いからである。

言語接触の要因から見た大野仮説

- タミール語クレオール仮説が成立するためにはクレオールが発生するような状況があったということが示されなければならない。
- 支配階層が少数であり、被支配者数が多数である状況で、共通語が必要な状況が考えられる。
- インドはむしろドラヴィダ語族とインド・ヨーロッパ語族の接触地域なのでその間の接触言語の発達が考えられる。またインドでは地域特徴という語族を越えた特徴が顕著であるが、日本語にはそのような同じ特徴はない。